

前兵児の謡 (頼 山陽)

衣は 亘に 至り 袖 腕に 至る

腰間の 秋水 鉄をも 断つ 可し

人 触るれば 人を 斬り 馬 触るれば 馬を 斬る

十八 交を 結ぶ 健児の 社

北客 能く 来らば 何を 以つてか 酬いん

弾丸 硝薬 是れ 膳羞

客 猶お 属贖 せずんば

好し 宝刀を 以つて 渠が 頭に 加えん

衣至亘 袖至腕 腰間秋水鐵可断
人觸斬人馬觸斬馬 十八結交健児社
北客能来何以酬 彈丸硝薬是膳羞
客猶不屬贖 好以寶刀加渠頭

解説 山陽が鹿兒島に遊んだ折り、同地の俚謡「兵子歌」を知り、その勇壮さに感じ入り、翻案したもの。

語釈 ※兵児若者。島津藩では十五歳以上二十五歳以下の青年をこう言った。※肝脛の骨が原義。それから向こう脛の意。※腕：肘と手首の間。※腰間：腰の部分。※秋水：秋の澄んだ水の意から、曇なく冷く光る劍。※斬馬：馬を斬るの意。※十八：結社の数ではなく年齢と見た方が妥当。※健児：元氣盛んな男子。※社：社は団体。※北客：北方から来た人物。隣国肥後の領主・加藤清正を指す。※弾丸：銃弾、破弾などの意。※硝薬：火薬・合薬。硝は硝石。※膳羞：飲食物をさす。※属贖：十分であることをいう。※好：決意を示すことば。よしそれならば。※宝刀：宝として珍重するに足る刀。※渠：彼に同じ。

通釈 薩摩隼人は意氣軒昂、勇武の氣風に満ちている。衣服はわずかに体を覆うのみ、肘も脛も丸出しである。とはいいながら腰にたばさむ刀は業物だ。抜けばまさに玉散る氷の刃、巻藁や青竹などはおろか、鉄をも一刀のもとに両断する。触れるものは人も馬も立ちどころに斬って捨て、右に左に薙ぎ掃い、刃こぼれひとつしない。それは、あたかも漢代の名劍、斬馬にも似ている。男子十八ともなれば、少壯の氣、最も盛ん、健児の社に入り、胆も技も磨く。小癩にも肥後の加藤清正が領土を冒すことあれば、目にも見せてくれようぞ。雨霰と弾丸を射かけ、ついで白刃かざして斬り込むのだ。砲彈火薬のもてなしが氣に食わず、満足しないとなれば、いたし方ない。その時は、どいつもこいつも素首を叩き落とすばかりである。